



城

第五十一回 小田城

～戦国最弱(?)の武将の奮闘～

山本 忠博



小田城跡
(つくば市教育委員会提供)

今回ご紹介するのは、茨城県つくば市の小田城です。一般での知名度はほぼないと言っていいでしょう。しかし、この城の主である小田氏15代の氏治は、一部の戦国マニアの間で“戦国最弱の武将”とか“常陸の不死鳥”と呼ばれて、妙な人気を得ています。“最弱”と呼ばれる所以は、とにかく居城を奪われることが多かったことにあります。とはいえ、何度も奪われるということは、何度も取り返しているわけで、それが“不死鳥”と呼ばれる所以です。複数の大勢力の狭間を泳ぎきれなかった氏治の一生を見ると、徒労感と一種の達成感が、交錯します。

関東の名族小田氏と小田城のはじまり

小田氏の始まりは、鎌倉時代まで遡ります。始祖は、源頼朝の配下の有力な御家人で、奥州藤原攻めでは大將軍を務め、頼朝の死後には十三人の合議制の一人になった人でした。この始祖が、頼朝の存命中に常陸国(現茨城県)の守護となり(1185年)、筑波郡に居館を構えたのが、小田城の初めとされます。

南北朝期には、小田氏は当初南朝方となったため、小田城には、南朝の中心人物である北畠親房が入ったこともありました。親房は、小田城で「神皇正統記」を書いたとされます(1339年)。この著作は、後世の皇国史観に大きな影響を与えることになります。

さて、時代は下って室町時代です。室町幕府による関東支配の長は、第三十一回石神井城と第三十五回堀越御所で取り上げた鎌倉公方です。この鎌倉公方の三代目を支える八家の有力大名とされたのが関東八屋形で、そのうちの一家が小田氏でした。

ただ、戦国時代に入る頃には、小田氏の勢力は縮小しており、同じ関東八屋形で常陸国の北部を領した佐竹氏(室町期の常陸国守護)等に圧迫されていました。

小田氏の中興

下り坂にあった小田氏の家勢を、一時的とはいえ立て直した人物が、14代政治(1492-1548年)です。実はこの人には、初代堀越公方の足利政知のご落胤だとする説があります。堀越公方とは、半独立勢力化した鎌倉公方に対抗するために室町幕府が関東(伊豆国(現在の伊豆半島))に送り込んだ、時の將軍の兄です。と、いうことは、政治は、將軍家に通じる血筋ということになります。ちなみに、鎌倉公方は、堀越公方が伊豆に下向する前に下総国(現在の茨城県南西部、千葉県北部の辺り)の古河(現茨城県古河市)に移ったため、以降、古河公方と呼ばれることになります。

この頃の関東は、旧来の勢力が多数残っており、政治の周囲にも、同じ関東八屋形の佐竹氏と結城氏、それに上述の古河公方等がいました。政治は、これらの勢力とある時は結び、ある時は戦って、小田氏の勢力を上げました。彼は、後世において、小田氏中興の祖と呼ばれます。

しかし、政治の晩年には、小田氏の先行きに暗雲が垂れ込めます。新興の北条氏が関東中央に侵出してきた際の川越夜戦(1545年)で、政治は、古河公方に味方して北条方と敵対したのです。しかし、古河公方が敗走するに至り、それ以降、小田氏は北条氏の脅威に晒されることになります。北条氏は、二代堀越公方を撃つて(1493年)伊豆国を奪取することから始めて、とうとう下総国の古河公方まで敗走させるに至ったわけです。川越夜戦が、関東の新旧勢力の入れ替わりを決定付けたと言えます。

小田氏15代氏治の苦闘

(小田城の失陥と回復 その1回目)

政治の死後(1548年)に、小田家の家督を継いだのは、息子の氏治です。彼の当面の敵は、下総国の結城氏でした。

北条氏と手を結んだ結城氏は、1556年に小田氏を攻めます。氏治はこの戦いに敗れ、小田城を失います。そして、重臣の菅谷政貞すげのやまさだの下に逃れました。この政貞という人が忠義に篤いなかなかの人物だったようで、同年中に小田城を取り戻しています。

氏治は、家臣や領民に慕われていたようで、この後も何度も小田城を奪われますが、彼らの協力により、何度も取り戻すことができました。

(小田城の失陥と回復 その2回目)

1回目の奪還の主要因は、北条氏の方針変更にあります。北条氏は、常陸国の北部から勢力を拡大してきた佐竹氏に対抗するために、常陸国南部の小田氏と手を結ぶことにしたのです。その結果、結城氏は、対小田氏戦で北条氏の支援を受けられなくなり、小田氏は小田城を奪還できたわけです。

そうすると、小田氏の敵は佐竹氏になります。しかし、1557年に氏治は佐竹氏に敗れて小田城から逃れるはめになります。それでも、1559年に菅谷政貞が再び小田城を奪還しています。

(小田城の失陥と回復 その3回目と4回目)

北条氏によって関東から追い出された旧勢力は、越後えちご国(現新潟県)の上杉謙信を頼りました。その謙信が、北条氏討伐の軍を起したのは、1560年のことです。その際に、関東の諸将の多くが謙信の配下に着きました。氏治も謙信に従って、北条氏の小田原城を囲んでいます。このときは、小田原城を落すには至らず、謙信は越後国に引き上げています。

さて、氏治は、謙信が去ってしまうと、再び北条氏の誘いに乗って、北条氏に着いてしまいます。この背信を、佐竹氏が謙信に訴えたため、謙信は氏治の討伐に向かいました。1564年のことです。このときの謙信の動きは早く、氏治は十分な準備もしいまま謙信と佐竹氏を迎え撃つことになり、案の定、小田城は謙信方に奪われます。そして、小田城には佐竹氏の配下が入りました。その後、1565年に佐竹氏の当主が死去した際の混乱に乗じて、氏治は小田城を奪還しています。

しかし、1566年に謙信の再出兵にあって、氏治は再び小田城を失っています。このときは、謙信に降伏し、小田城への帰還を許されています。

(小田城の失陥と回復 その5回目)

常陸国の統一を目指す佐竹氏としては、小田城はどうしても落としたい城でした。佐竹氏は1569年に小田城を攻めますが、氏治はこれに大損害を与えて撃退し

ています。1570年には結城氏も小田領に侵入しますが、こちらも、菅谷政貞の夜襲が奏功して大勝利でした。

しかし、良い事だけで終わらないのが小田氏です。1573年元旦の明け方に、小田城は突如として佐竹方の兵に奇襲されます。前夜の大晦日に連歌会を開いて油断していた小田方は、なすすべなく城を追われました。それでも、氏治は、すぐに兵を集めて小田城を奪還しています。

(小田城の失陥と……遂に回復ならず)

同じ年に、再び佐竹氏と戦って敗れ、氏治はまたも小田城を奪われます。今回ばかりは、小田氏も危機に陥りました。佐竹氏の優勢は明らかで、小田氏に最後に残された菅谷政貞の城も佐竹方に囲まれました。菅谷政貞は氏治を城から脱出させ、自らはやむなく佐竹氏に降伏しました。

それでも、まだ終わりません。氏治の庶長子が北条氏に出仕しており、この庶長子の嘆願により、北条氏が小田氏の救援に動きます。北条氏の支援を得た氏治に菅谷政貞が復帰し、小田氏は、またも小田城の奪還を目指して佐竹氏に挑みます。

(氏治の最後の戦い)

北条氏による小田氏の支援は、1574年から1590年まで続きます。この間、小田氏は小田城を奪い返せませんでした。佐竹氏も小田勢を駆逐できませんでした。小田城奪還に執念を燃やす氏治は、1590年に小田城に迫り、あと一歩のところまで押し込んでいます。

しかし、ここまででした。同じ年に豊臣秀吉による北条氏の討伐、いわゆる小田原征伐が起こったのです。北条氏の支援を受ける氏治が、秀吉の下に参陣するわけもなく、結果として、北条氏と同様に全所領を没収されてしまいます。ここに、戦国大名としての小田氏は、滅亡を迎えました。

氏治は、その後、娘が側室に入っていたついで、結城秀康きひでやす(結城家の養子に入った徳川家康の次男)の客分300石として、余生を送りました。ちなみに、菅谷政貞の子孫は徳川家の旗本5千石になりました。

その後の小田城

小田城は、最終的に佐竹氏の物となります。しかし、関ヶ原の戦いの後に、佐竹氏が秋田に移封されるとともに廃城となりました。

現在の小田城跡は、国指定史跡に指定されています。つくば市によって、発掘調査のうえ良く整備が行われ、「小田城跡歴史ひろば」になっています。